

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 乙第 2313 号

Outcome of infants presenting rectal bleeding: A retrospective study in a single institution

(新生児期および乳児期における下部消化管出血の解析: 単一施設における後ろ向き検討)

森 真理 (もり まり)

博士 (医学)

論文内容の要旨

日常診療において、新生児期・乳児期に下部消化管出血をきたす児に遭遇することは少なくないが、その病態は不明な点が多い。

今回我々は、2008年1月から2012年6月までに、新生児期・乳児期に下部消化管出血を来し当院で入院加療を行った、新生児・乳児消化管アレルギー (FPIP: Food protein-induced proctocolitis) および新生児一過性好酸球性大腸炎 (NTEC: neonatal transient eosinophilic colitis) と考えられた22例を対象に、その臨床像と発症後の経過を検討した。また、下部消化管内視鏡検査を施行し、S状結腸の生検組織を用いて免疫染色を行った他、シグナル伝達分子の発現を microarray 法にて網羅的に検討した。さらに発現の増強を確認した CXCL13 および CCL11 (eotaxin-1) に対し、それらの発現を RT-PCR 法を用い確認した。

対象は、FPIP 13例(平均日齢 10.46 ± 19.26)、NTEC 9例(平均日齢 0)。両群において、末梢血白血球の上昇 (12,685 ± 3,754/μl、30,978 ± 16,166/μl) および好酸球の上昇 (1,084 ± 816/μl、4,456 ± 3,341/μl) を認めた。下部消化管内視鏡検査では、両群において、表層性の炎症・出血、リンパ濾胞の過形成を認め、粘膜組織の病理では、好中球、リンパ球および好酸球の浸潤を認めた。

また、RT-PCR 法ではリンパ球の活性化因子である IL-6、好酸球遊走因子である CCL11 とリンパ濾胞形成因子である CXCL13 の発現亢進を認め、特に FPIP において CXCL13 の発現が強かった。粘膜組織の免疫染色では、CD3 陽性細胞と IgA 陽性細胞を認めたが、IgE 陽性細胞は認めなかった。検討を行った 22 例の追跡調査では、FPIP の 1 例にのみ、1 歳時に牛乳アレルギーを確認した。

新生児期・乳児期の FPIP、NTEC においては IL-6、CCL11 と CXCL13 が病態に関与している可能性が示唆された。これらに認められる下部消化管出血では、アレルギー反応の関与が示唆されているが、その後の経過では 1 歳時において牛乳アレルギーを発症している児は 1 例のみであった。